

四条金吾殿御返事

文永九年五月二日

五十一歳

貴^き辺^{へん}又^{また}日蓮にしたがひて法華^{ほけ}經^{きやう}の行者として諸^{しよ}人^{にん}にかたり給^{たま}ふ。是^{これ}豈^あ流通^{にるつう}にあらずや。法華^{ほけ}經^{きやう}の信心^{しんじん}をとをし給^{たま}へ。火^ひをきるにやすみぬれば火^ひをえず。強盛^{かうじやう}の大信力^{だいしんりき}をいだして法華^{ほけ}宗^{しゆ}の四条金吾^{しじやうきんご}・四条金吾と鎌倉^{かまくら}中^{ぢゆう}の上下万人^{じやうげばんにん}、乃至^{ないし}日本^{にほん}国^{こく}の一切衆生^{いっさいしゆじやう}の口^{くち}にうたはれ給^{たま}へ。

(五九九六二行目、四行目)

本抄は、佐渡配流の翌年・文永九（一二七二）年五月二日、日蓮大聖人御年五十一歳の時、佐渡一谷で認め^{しよた}四条金吾頼基に与えられた御消息で、「煩惱即菩提書」との異称^{いしやう}があります。四条金吾は、本抄の一カ月前に鎌倉からはるばる佐渡を訪れています。金吾が鎌倉へ帰る折、妻・日眼女への『同生同名御書』を託され、その書の中で、夫を佐渡まで遣わした日眼女の志を称賛され、さらに本抄では金吾本人の来訪を感謝されています。

大聖人は本抄の二カ月程前に『開目抄』、そして翌年には『観心本尊抄』を認められ、末法適^{ちやく}時の人本尊・法本尊を明かされました。そしてこの両書の間に著された本抄では、三大秘法について初めて「本門寿量品の三大事」（御書五九七）と示されており、一期^{いちご}の御化導上、重要な意義を拝することができます。

本抄の内容について、総本山第六十七世日顕上人の御説法を拝しますと、

①最も深い即身成仏の大法が南無妙法蓮華經であること、

②お題目を唱えるところ、我々の煩惱の姿がそのまま菩提の大功德として成ぜられること

③この正法をいかなることがあっても強盛な大信力をいだして持ち通^{たも}さなければならないこと、

④夫婦和合、異体同心しての信心が大切なこと、

という四つの要点が拝されます（大日蓮・平成四年十二月号趣意）。このうち、今月拝読の御文は、③の部分に当たっており、四条金吾の信心を称賛しつつ、弛^{たゆ}むことなく信心を貫くよう激励されている箇所です。

この拝読の御文では日蓮大聖人は、「法華經の行者」の具体的な実践を示されているところでもあります。冒頭の「法華經の信心をとす」とは「持続の信心」のことで、いかなる時も御本尊を信じ祈りを貫き通すことです。大聖人はそのことを、道具を使って、摩擦によって火を起す例えで教えられています。

即ち、火を起すそうとしても、手を休めてしまえばつかないように、途中で手を抜き、諦めてしまうことは人生の敗北に通じます。いかなる状況でも、粘^{ねば}り強^{つよ}く挑^{ちやう}戦^{せん}を続けていくなかで一生成仏の境涯を開き、勝ち取ることができるのです。

続いて大聖人は、「強盛の大信力をいだして」と呼び掛けられ、そして、強盛な信力・行力を奮い起こしていく時、偉大な仏力・法力が現れてくるのである、と、大聖人は、その強盛な信力をもって「法華宗の四条金吾・四条金吾」と、周囲から信頼される存在

になつていきなさいと仰せられています。

そして、仏法を實踐する私たちに不可欠なのが、不退転の持続の信心と實踐であることを教えられているところであります。本抄は、四条金吾への励ましのお手紙ですが、そこには、一人でも多くの門下が大難を乗り越え、宿命を転換し、幸福を勝ちとつてほしいとの、大聖人の御心情が伺われるのであります。

しかも、大難の渦中にあつても、折伏・布教に挑む四条金吾に、もう一重深く打ち込むように、大聖人は強調なされているのであります。それが冒頭の、「法華經の信心をとをし給へ」との御指南なのです。

つまり、火を起こす作業と同じように、「法華經の信心を最後まで貫き通していきなさい」と述べられているのであります。

ところで当時、「火」は、『火打ち石』等の道具を使い、摩擦による熱で起こしていました。火が出るまで、間断なく勢良く作業しなければなりません。手を休めてしまえば、火は着きません。つまり、それと同じように、「魔」につけ入れる隙を与えずに、地道に信心を貫き通していくことの大切さを教えられているのであります。

いつ、いかなる時も、妙法を心から信じ、自行化他にわたつて弘めていく強き信心こそ、成仏への最大の原動力となることを御指南下さっているのです。

ゆえに、「強盛の大信力をいだして」と、呼び掛けられているのであります。

大変な時・大切な時に、「今こそ」「いよいよ」と、大信力を奮い起こし、広宣流布の誓願を胸に前進していくことが広布への第一歩となるからです。

そして、「法華宗の四条金吾・四条金吾と鎌倉中の上下万人乃至日本国の一切衆生の口にうたはれ給へ」との仰せは、即ち、大弾圧を受けていた当時、人々から「法華宗の誰々」と言われるのは、「あの、法華宗の者か！」と、後ろ指を指される。あるいは、ひた隠しにしたい呼ばれ方だったことでしょう。それを、敢えて、大聖人は、「さすが、あれが、法華宗の四条金吾・四条金吾」と、鎌倉中、日本中の人々に讃嘆されるような、信賴と実証を得ていきなさい、との御指導をなされたのです。

短い手紙でありますが大聖人が弘められる法門は、天台・伝教等の所弘の法より一重立ち入った深い法門であり、「本門寿量品の三大事」であること、この南無妙法蓮華經こそ一切仏法の極説中の極説であること、その大仏法の力用として境智冥合、煩惱即菩提・生死即涅槃の原理等が明かされているのであります。

すなわち、このお手紙の底流にあるものは、末法の衆生救済の御本仏、久遠元初自受用報身如来としての、烈烈たる御確信であります。いうまでもなく、そうした内証の法門の内容については、同じ年の二月、やはり四条金吾に託された「開目抄」に、縷々説かれているところではありますが、「要中の要」をとつて、実に簡潔にその核心が、ここには示されている御文なのであります。

元来、法華經の「本門」は、全体が、末法弘通の大仏法たる三大秘法の南無妙法蓮華

經への序分じよぶんであり、予言書よげんしょとなっているのです。「迹門しやくもん」においては、舍利弗以下の声聞の弟子たち、提婆達多のごとき悪人、竜女以下の女性等々、釈迦仏有縁の人々が、次々と成仏得道していく。それに対して、「本門ほんもん」では、在世の衆生が、本門の説法を聞いて得脱したということは、一つとして説かれていないのです。このことから、本門の説法は、それ自体、釈迦在世の衆生のためではなく、また、釈迦の仏法のためでもない、滅後のため、なかんずく、「釈迦の教法が力を失う末法という時に出現する、新たな大仏法」のための準備の書であることが知られるのであります。

短い、簡潔な表現をなれていますが、この南無妙法蓮華經こそ、究極の救済の法であることが、明快に説かれ、しかも全てを包含ほうがんして余すところがない。なお「師範」「導師」「指南」と使い分けられている言葉にも、深い御配慮がうかがわれる御文であります。即ち、仏法を知らない人々にとつては、何を目指すべきかの方向を指し示す「指南」が必要であり、現に仏道を求めて修行し前進している菩薩にとつては、その前進を正しく導く「導師」が必要であり、すでに仏果を得た仏にとつては、妙法は仏としての範を示す「師範」である、と言う大事な事を御教示下さっている御文あります。

これを、われわれの実践に約するならば「一切衆生皆成仏道の指南」ということは、苦しみ、悩みに直面したときに、根本的解決は何に求めるべきかということ、これは御本尊に祈り、真剣に唱提に励むことであります。「十方薩埵じつぽうさだつの導師どうし」とは、広宣流布を目指し、一切衆生救済を目指す活動において、あくまで御本尊様を根本の導師としていくことであり、「三世の諸仏の師範」とは、御本尊を師範とし、正境として境智冥合したとき、我がこの生命は仏界に住し、仏身を成ずるということであり、しかも、それは、いかなる時代であろうと、いかなる国土であろうと、いかなる境涯にであろうと、永遠に変わることはない不動の教えであることを知らなければなりません。

本抄述作の時期は、大聖人が佐渡配流の身となり門下一同に動揺が走る中、北条家の内紛が起こり（二月騒動）、『立正安国論』に予証された後災の一つである「自界叛逆難」が現実となった直後でした。この動乱期にあつても四条金吾殿は、遠く佐渡の大聖人のもとを訪れ御供養の品々をお届けし、外護の任を果たされているのであります。また、鎌倉にあつては門下の団結と妙法弘通に尽力していたことが、御書から拝せられるのであります。

しかも、大聖人の佐渡配流という法難の余波は弟子檀那にも及び、信心を持ち続けることすら命懸けの状態でした。そのような折、大聖人は拝読の御文に「法華經の信心をとをし給へ」と仰せられ、いかなる難に遭つても信心を貫き通すこと、また「貴辺又日蓮にしたがひて法華經の行者として諸人にかたり給ふ」と仰せのように、日蓮大聖人様に従つて法を弘めることの大事を教示されています。つまり信心に不退なく折伏を实践するところに、大聖人の御意に適った仏道修行があると御教示下さっているのであります。

大聖人が佐渡配流を赦免されると、金吾は意を決して積年の大願であつた主君・江間氏への折伏を敢行かんこうします。すると、同僚たちの怨嫉おんしつによる誹謗ひぼうや、それを真に受けた主君の

命による領地替え、謹慎など、三障四魔の働きによって数々の試練が降りかかりました。

しかし金吾は、妻・日眼女と力を合わせて信心を貫き、あらゆる難を耐え忍びました。その結果、数年後には主君の信頼も回復し、没収されていた領地も返還加増されたのです。そして建治四（一二七八）年一月には、出仕の列に加えられ、「お伴の侍が二十四、五人いるなかで（中略）背の高さといい、顔立ちといい、魂といい、乗る馬から下人に至るまで第一であり、中務左衛門尉（金吾）は立派な男であると、鎌倉中の子供達が辻々で話している」（四条金吾殿御書・一一九七）とあるように、本抄で「四条金吾・四条金吾と（中略）日本国の一切衆生の口にうたはれ給へ」と大聖人が策励（励まされた通りに姿なつた）されたとおりの姿を示すことができたのです。

我々にとって一番大事なことは、たとえ多くの苦難が押し寄せたとしても、御本尊様への絶対信をもって不_レ自_レ惜_レ身_レ命_レの姿勢を貫くならば、私達も最善の果報を得ることができると言う事であります。今こそ、何としても折伏行に邁進していこうではありませんか。

御法主日如上人猊下（大日蓮・令和六年十一月号）は

「折伏は御本仏宗祖日蓮大聖人様からの御遺命であります。よって、私どもは何を差し置いても、大聖人様の御遺命のままに破邪顕正の折伏を行じて、一人でも多くの人々の幸せを願い、悔いなく戦いきっていくことが今、最も肝要なのであります。」と御指南です。

令和七年「活動充実の年」の初頭にあたり、本年の折伏誓願を成就するため、全国・全世界で一斉に一月唱題行が行われています。混沌深まる世の中を仏国土へと変えていくためにも、今年は昨年以上に活動を充実させ、唱題につぐ唱題、真剣なる祈り、そして勇氣ある行動をもって折伏行に徹し、本年こそ折伏目標を達成してまいりましょう。以上。

（令和七年一月度・御報恩御講の砌）